



2023年8月10日発行  
公益財団法人 大川美術館  
〒376-0043 桐生市小曾根町3-69



ジョン・スローン《屋根上の母子》1914年、エッチング・紙、10.6×14.8cm

## ことば 138

ニューヨークの夏の暑さは、借家の人々を屋上へと駆り立て、そこには比較的涼しい即席の避難所ができる。この場所には社会意識の証があるのだろうが、感傷的でないことを願う。

(ジョン・スローン 展覧会カタログ『John Sloan Printings and Prints』(1946年、ダートマス大学)より)

## 「大川美術館コレクションによる 20世紀アート120」

新田 量子

郡山市立美術館において、企画展「大川美術館コレクションによる 20世紀アート120」（会期：4月15日～6月11日）を開催し、成功裡に閉幕を迎えた。本展は、大川美術館の皆様のご尽力により、20世紀の多彩な名品を幅広く堪能できる展覧会となった。「エコール・ド・パリとアヴァンギャルド」「アメリカン・シーンの画家たち」の2部構成で章立てしていただき、初代館長大川栄二氏が約40年かけて築き上げたコレクションを礎とした秀逸なラインナップを紹介した。

展示室で最初に来場者を迎えたのは、マティス、モディリアーニ、キリコ、ボナールによる人物の素描である。彼らの手の動きを感じさせる描線が、巨匠それぞれの画風の本質や描かれたモデルの内面に迫るような、味わい深い貴重な作品であった。「エコール・ド・パリ」の章では、ほかにもローランサンやユトリロなど、本展のなかでも特に来場者の人気が高かった作品が贅沢に並んだ。今回出品されたユトリロによる《花》は、モンマルトルの街並みを数多く描いた彼の作品には例の少ない静物画である。ユトリロは、のちに妻となる女性と知り合った頃から花の絵を描き始めた。そしてそれを幾度となく彼女や親しい友人に贈った

という。生き生きとした筆致と色彩が、花の生命力を感じさせる。



モーリス・ユトリロ《花》1940年

「アヴァンギャルド」の章では、キュビズムやシュルレアリスムなど、20世紀の革命的な美術運動の中核を担った芸術家の作品を中心に展示した。なかでも20世紀最大の巨匠ピカソによる作品は、キュビズム的な表現が顕著な油彩画のほか、版画や陶器も紹介した。彼の制作を多面的に知ることのできる豪華なラインナップは、来場者からの好評を得た。

第2部では、はじめに、アメリカを代表する画家ベン・シャーンの初期から晩年にかけての代表作をまとめて鑑賞することができ、本展の大きな



郡山市立美術館入口



展示風景（郡山市立美術館）

見どころとなった。続いて、大川氏が美術作品をコレクションするきっかけとなった松本竣介が影響を受けた画家、野田英夫をはじめ、アメリカに学んだ日本人画家を紹介した。当時ニューヨークは、人口の増加に伴って地下鉄や高層ビルなどが建設され、生活も急激に変わりつつあった。彼らが学んだアート・スチューデント・リーグで教鞭を執ったジョン・スローンは、そこで暮らす庶民の日常を軽快にとらえ、幸福感をも感じさせるような臨場感あふれるタッチで描いた。都会の何気ない日常の表現には、思わず見入ってしまうような魅力がある。来場者からは、「アメリカの絵画とそれを学んだ日本人の画家の作品をまとめて鑑賞できて感動した」という感想があった。

本展の最終章、「ポップ・アート」では、アン

ディ・ウォーホルをはじめ大衆文化にインスピレーションを得た先鋭的な芸術家たちの作品が並んだ。ウォーホルの《マリリン・モンロー》は、本展の広報にあたりメインビジュアルとして使用した。高い知名度、ひととき強いインパクトをもつ本作は、多くの方々に展覧会へ足を運んでいただくきっかけとなったのではと思う。

会期中には関連事業として、大川美術館田中淳館長による講演会、同じく大谷明子学芸員による特別ギャラリートークを開催した。出品作品の魅力が伝わるわかりやすい解説はもとより、大川氏のエピソードやコレクションの見どころをお話しいただき、来場された方々は熱心に耳を傾けていた。講演会でご紹介いただいた大川氏の次の言葉は、彼の美術作品に対する深く熱い想いを伝えている。

よい作品をできるだけ多く、また、何度もみることが大事です。(中略)よい絵は、眼にも心にとっても無限の教育者となり、それにより自然をみる観賞力も人をもみる判断力も豊かとなり、街並みをみることも、くたびれた生活の道具も、果物も、また、街のショーウィンドーの中にすら興味ある曲線や色を感じるでしょう。

そして、そんな価値観が自然と周囲の人間関係を大切に、他人の痛みが判り、社会性の眼も開かれ、故郷や自然の有難みも判り、真の教養も生まれ、素晴らしい地方文化が生き続けられるのです。(大川栄二『絵画入門 絵のある生活と人生』公益財団法人大川美術館、1994年、8頁)



ギャラリートークの様子

激動の20世紀、二度の世界大戦は人々の価値観に大きな影響を与え、急激な経済成長によって生活も変化した。そんな世界に翻弄されながらも、それまでの美の定義を打ち破り、自らの新しい表現へと挑戦していった芸術家たち。今回の展覧会は、多くの来場者に20世紀アートの実感、そしてなにより大川美術館のコレクションの魅力を味わい、知っていただくまたとない機会となった。改めて、末筆ながら、展覧会開催に際し多大なご協力をいただいた大川美術館の皆様には、心より感謝を申し上げたい。そして、大川美術館の一層のご発展をご祈念申し上げるとともに、今後とも展覧会のほか、さまざまな事業において、変わらぬご厚誼を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

(郡山市立美術館 学芸員)

## 大川コレクション展を拝見して

荒木 康子

6月、大川美術館のコレクションによる「20世紀アート・セレクション—ピカソ、ベン・シャーンからポップアートまで」展を見に、郡山市立美術館を訪ねた。お目当てのベン・シャーンに、久しぶりに再会するためだった。私がこの3月まで学芸員として勤務していた福島県立美術館にとっても、ベン・シャーンはコレクションを形づくる重要な画家の一人で、折に触れ大川コレクションを拝見していたし、2011年、「ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト—写真、絵画、グラフィック・アート—」展を開催した折には、出品のご協力をいただいた。大川美術館のシャーンは私にとってちょっと特別な存在だ。そんなことからこの機会に、シャーンやアメリカ美術、大川コレクションについて、再び想いを巡らせてみようと思う。

大川さんと絵画との出会いは松本竣介だった。そこから美術品蒐集が始まったという。大川さんの関心は、竣介を起点とし、やがて竣介が影響を受けたとされる野田英夫に向かっていく。日系2世でアメリカ生まれの野田は、1933年、メキシコの画家ディエゴ・リベラの助手としてニューヨークのロックフェラーセンター RCA ビルの壁画制作に携わった。そこには同じく助手としてベン・シャーンの姿もあった。大川さんのコレクションにシャーンの初期の壁画習作が収められているのも、自然の流れだろ

う。そして野田も学んだことがある美術学校、アート・ステューデントズ・リーグの画家たち、20世紀初頭のアメリカ美術に新しいテーマを持ち込んだ「ジ・エイト」の画家たちへとコレクションは広がっていった。そこに野田と同じくアメリカで学んだ国吉康雄、清水登之、石垣栄太郎といった日本人も加わる。しかしこうした第二次世界大戦以前のアメリカ美術のコレクションは、日本では稀有である。特にロバート・ヘンライやジョン・スローン、アーサー・B・デイヴィス、エヴァレット・シンといっても、ほとんどの人にとっては馴染みのない名前だろう。戦後アメリカ美術のインターナショナルな華々しい躍進ぶりに比べると、彼らは、いってみればアメリカという場所に強く根差したローカルな画家たちである。



野田英夫《ブルックリン郊外》1932年頃



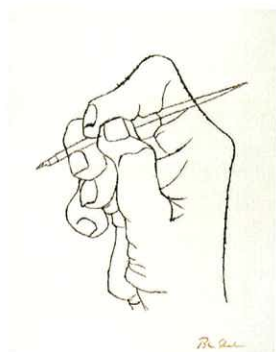
国吉康雄《バーウィック近くの墓地》1941年

アメリカは移民の国、人種の坩堝と言われる。特に20世紀に入るとイタリアなどの南欧、ポーランドやロシアといった東欧の人々、そして迫害から逃れるためユダヤ人達が、アメリカに新天地を求めてやってきた。彼らは最初にヨーロッパから移民してきた旧移民に対して、新移民といわれる。日本からの移民も同じ頃、西海岸を中心に本格化したようだが、一方で日本人排斥運動も現地では起こっていた。

賃金の安い特に新移民労働者の存在に助けられ、第一次世界大戦後のアメリカは、大量生産、大量消費という現代の経済構造の土台を作った。輝かしい狂騒の時代だった。それは一見煌びやかに見えるけれど、実際にそこに生き、暮らしていた多くの人たちは何を感じていたのだろうか。大川さんがコレクションしたのは、いずれもこの時代のアメリカを生きた画家達だった。いつも思うのだが、野田も国吉も清水も、それぞれに複雑なものを抱えていて、近づくことをなかなか許してくれない。特に国吉は戦前からアメリカで高く評価されていたが、戦争中はアメリカと日本のはざままで苦しい時代を過ごしている。国吉の描く作品には何層もレイヤーがかかっており、核心が姿を現すことはない。謎多き画家である。

アメリカは誰でも受け入れる懐の深さを持っているが、それと同時に差別と格差という暗い影も併せ持つ。厳然とした階級社会なのだ。自分にとって異質な文化の中で、創作活動を続けていくとはどういうことなのだろう。アイデンティティの揺らぎ、存在の不確かさに苛まれることも当然あったに違いない。

ベン・シャーンもそうだったと思う。ユダヤ、リトアニア、アメリカ、絵の中には言葉にならない様々なものが絡まり合っている。シャーンの線は、強く決然と引かれているが、ぎざぎざと震えてもいる。私たちの心をぐっと掴む線もあれば、繊細に揺れ動き何かを言いあぐねているような、そんな線もある。ベン・シャーンと野田、国吉を一括りにするわけではないが、どの作家の線にも、時にとまどい、ためらうような震えを私は感じてきた。その折り畳まれた心の奥には簡単に触れられない部分がある。そのわからなさが見るものに多くの問いを投げかけ、惹きつけてやまないのではないだろうか。



ベン・シャーン《版画集『一行の詩のためには…』  
リルケ「マルテの手記」より「一篇の詩の最初の言葉」1968年

アメリカは Great America への道を歩んだ。しかしその周縁に生まれた影には大きな闇がある。多くのものを飲み込み、その懐は深く広いが、得体の知れない底なしの負の感情が渦巻いてもいる。周縁を生きたベン・シャーンや野田、国吉たちの作品には、そうしたアメリカの光と影が色濃く映し出されている。企業家としてアメリカをよく知る大川さんだからこそ、彼らに心惹かれたのではなかったかと想像する。底流にある、もう一つのアメリカ美術の水脈が、大川さんのコレクションから見えてくる。

(元福島県立美術館 学芸員)

## 大川美術館 — 夏のイベント2023 —

今年の大川美術館の夏は、企画展と特集展示に関連して、講演会、出品作家によるワークショップ、当館学芸員によるギャラリートークなどイベントを多数開催いたします。

### 【企画展】

#### 20世紀アートセレクション

— ベン・シャーンとアメリカン・シーンを中心に

### 【特集展示】

#### コレクションによる日本の木版画

— 浮世絵版画、創作版画、桐生の木版画—

会期：2023年7月15日(土)～9月10日(日)

### 【企画展関連イベント】

#### 講演会「大川美術館の20世紀アートコレクションについて」

講師：田中淳（当館館長）

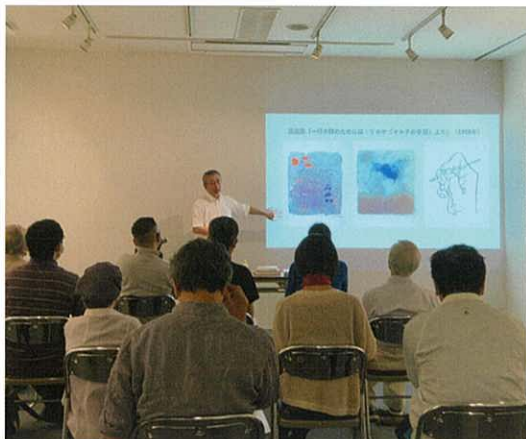
日時：7月15日(土) 14:00～15:30

会場：展示室6

定員：30名（申込不要）

### 【内容】

大川美術館のコレクションには、約600点をこえるヨーロッパ、アメリカのモダンアート作品があります。もとよりそれらは、コレクターであった当美術館の創設者大川栄二(1924-2008)の個性と感性が反映しています。今回の「20世紀アートセレクション」展では、1920年代からのエコール・ド・パリの作品とともに、第一次世界大戦後に急速に伸長してきたアメリカの美術を紹介します。講演では、モダンアートの歴史を背景にしながらい集された当美術館のコレクションの「個性」についてお話しします。



企画展関連イベント 講演会の様子

### 〈特集展示関連イベント〉

講演会「日本の木版画－浮世絵版画から創作版画へ」

講師：岩切信一郎氏（美術史家）

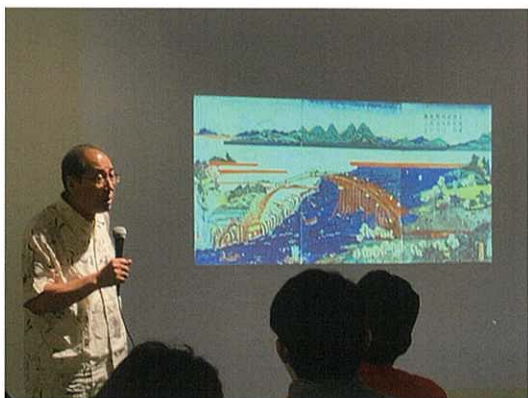
日時：7月22日(土) 14:00～15:30

会場：展示室6

定員：30名（申込不要）

#### 【内容】

「日本の版画」というと木版画である「浮世絵版画」がよく知られております。さらに海外からは木版画の盛んな国とされ「HANGA」（版画）も「MANGA」（マンガ）の語同様に日本発信の国際語となっています。講演ではそうした「日本の木版画」の歴史をたどりながらその技術や制作工程に触れ、浮世絵師を含めた版画家たちのことを話します。特に、絵師・彫師・摺師といった技術職人たちの協業制作としての「伝統（伝承）木版」と、版の絵も彫りや摺りをも一人で行う「創作版画」の両方の版画の魅力をお話しします。



特集展示関連イベント 講演会の様子

### 〈特集展示関連イベント〉

木版画体験ワークショップ1

講師：難波 多輝子さん

日時：7月29日(土)10:30～12:00

会場：展示室6

定員：10名程度

#### 【内容】

講師とともに、バレンを使って木版画の「摺り（すり）」の体験をします。版を重ね、さまざまなバレンの使い方で見られる表情をお楽しみください。

### 〈特集展示関連イベント〉

木版画体験ワークショップ2

講師：佐野 広章さん

日時：8月19日(土) 10:30～12:00

会場：展示室6

定員：10名程度

#### 【内容】

彫刻刀を使わずに手軽に版を作り、小さなオリジナルの版画を制作します。年齢を問わず安全に「版木（はんぎ）」からの作品制作をお楽しみいただけます。

学芸員によるギャラリートーク

日時：8月12日(土)、8月19日(土)、

8月26日(土)、9月2日(土) 各日14:00～

会場：展示室2

### 小さな特集展示 ねこのいる部屋

展示室3-2の一室では、企画展と特集展示と同時開催で小さな特集展示として当館コレクションからネコの作品をご紹介します。

ネコはかわいらしさと同時に気まぐれで自己中心的な一面も併せ持ち、また軽やかな身体能力や、紐や球を追いかけるなど種の本能としての愉快的な習性も見せます。現在に至るまで身近な動物として人々に愛玩され、歌川国芳、菱田春草、藤田嗣治など多くの画家をも魅了してきました。

ここでは、藤田嗣治による愛くるしい表情をみせる《猫》や、抽象とのあわいで毛の逆立つ姿を機知とユーモアある独特のイメージで描き出した伊藤久三郎による《猫電気》、暗闇から浮かび上がるような秀島由己男による銅版画作品など、当館コレクションよりさまざまに描かれたネコをご覧いただけます。

## 【研究ノート】

## 曾宮一念による松本竣介宛書簡 1

小此本美代子

はじめに

2019年の夏、展覧会に向けた松本竣介（1912-1948）の調査のため、松本竣介次男・松本莞氏を訪ねた。その折、曾宮一念（1893-1994）が松本竣介夫妻に送った書簡の存在を知った。年代は1936（昭和11）年8月25日から1937（昭和12）年8月20日までで、封筒のない手紙1通と葉書14通（うち代筆1通）の全15通である。

これらの書簡は、当館で開催された「生誕130年記念 曾宮一念展一室にけやきをゆする風」（会期：2023年4月18日-6月11日）にて初めて紹介した。本欄では15通を年代順に紹介する。

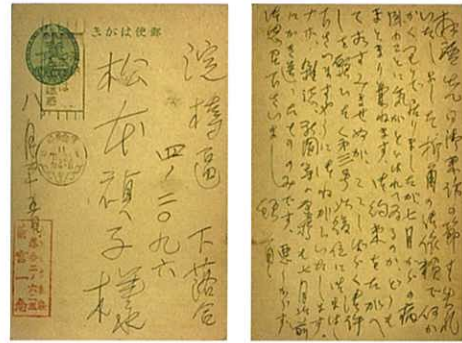
曾宮一念が、下落合に住んでいた中村彝（1887-1924）からの誘いを受けて、下落合3丁目の中村のすぐ近くにアトリエを構えたのが1921（大正10）年のことである。以後、1945（昭和20）年に静岡県富士宮市に移るまでのあいだ、曾宮はこの地に暮らした。下落合時代の曾宮は、1925（大正14）年、二科展に出品した《冬日》で梶牛賞を受賞、1931（昭和6）年には二科会会員となり、1935（昭和10）年には独立美術協会会員となり《種子静物》等を発表。1937（昭和12）年7月には独立美術協会を離れ国画会に所属し、以後風景画に独自の境地を示してゆくこととなる。

松本竣介は、1935（昭和10）年、二科展に《建物》で初入選し、1936（昭和11）年2月、禎子との結婚を機に下落合4丁目にあトリエ兼住居を構え、新たな生活のなかで新しい作風を展開していこうとしていた時代である。自宅アトリエを「綜合工房」と名付け、エッセイとカットの月刊誌『雑記帳』を刊行した。本誌は、翌年12月に第14号で終刊となったが、曾宮はこのわずか1年のあいだにエッセイ2編とカット5点を寄稿している。

これから紹介する書簡は、この『雑記帳』をめぐる連絡が多い。この時期、曾宮のもとには、のちに共に独立美術協会を脱会することとなる林重義、伊藤廉、里見勝蔵らが訪れ、手紙のやり取りなども頻繁になっていた。（曾宮の「昭和十一年八月下旬ヨリ十月中旬」の日記による）また、画商との往来が始まっている。微熱が続くなどして体調のすぐれない曾宮であったが、竣介が創刊した『雑記帳』を気にかけていた様子がかがえる。

(当館学芸員)

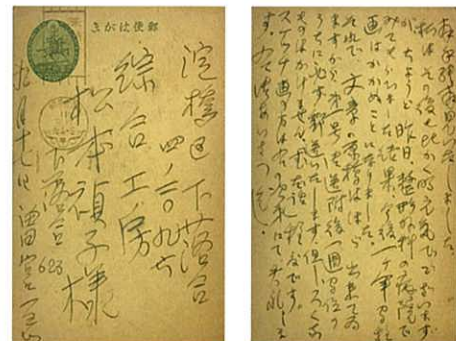
## 【松本禎子宛 1936.8.25 消印】



拝啓 先日御来訪<sup>※</sup>の節は失礼  
いたしました。折角のご依頼で何か  
かくつもりで居りましたが、七月からの病  
気のことに気がとらはれてゐるのか、どうも  
まとまり兼ねます。お約束をたがへ  
て相すみませぬが、ここしばらく御許  
しを願ひたく第三号以降位に御まはし  
下さいますやうに御ねがひいたします。  
ナホ、雑誌、新聞等の原稿も七月以前  
にかき送ったもののみです。悪しからず、  
御思召下さいまし 敬具

※曾宮一念の1936年8月15日の日記には、「十二時、林美子氏の紹介で随筆雑誌を作るといふ若い婦人が訪ねて来る。伊藤氏へ紹介する。」とある。「若い婦人」が禎子であったと考えられる。「伊藤」は、伊藤廉と考えられる。伊藤廉も林美子も『雑記帳』創刊号（1936年10月発行）に寄稿している。なお、この葉書の消印とおなじ8月25日の曾宮の日記の発信欄には、「松本禎子（原稿をこととはる）」と記されている。この葉書のことであろう。

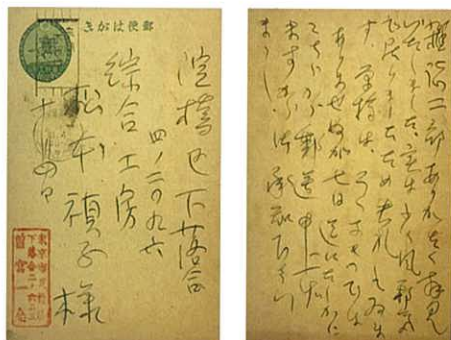
## 【綜合工房 松本禎子宛 1936.9.17 消印】



御手紙拝見いたしました。  
私はその後も比かく的元気でございます  
が、ちょうど昨日、整形外科の病院で  
みてもらいました結果、今後一ケ年間程  
画はかかぬことになりました。  
それで、文章の原稿はほど出来てゐ  
ますから、第一号御送附後一週間位の

うちに必ず郵送いたします。但しろくなものはかけません。「むだ話」程度です。スケッチ画の方は右の次第にて失礼します。右御あいさつ迄。

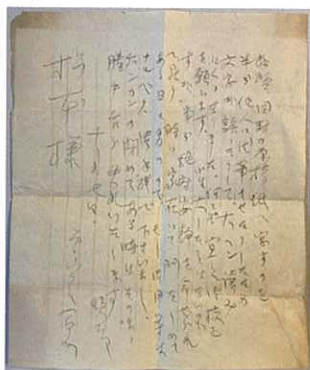
【総合工房 松本禎子宛 1936.10.4 消印】



雑誌二部ありがたく拝見いたしました。実は少々風邪気で居りましたため失礼してあります。原稿は、ろくなものではありませぬが七日迄にたしかにこちらから郵送申し上げますからご承知下さいまし。

【文末に十月七日】

【封筒なし、先の葉書から1936年と考えられる】



拝啓 同封の原稿紙へ写すのを半分他人に代筆させたりしたため文字が誤ったりして、大へん読みにくくなりました。何とぞ宜しく御校正を願ひます。小生大した事はないのですが、当分絶対安静を命ぜられて居り、時々家在にて門をしめて

ある日も多いので、もし御用等はナルベク、御手紙で下さいまし。ゲンカンの閉めてある時はそのまま勝手乍ら失礼いたします。

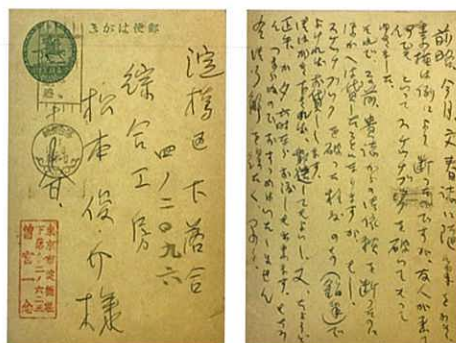
十月七日

曾宮一念

松本様

※この手紙が同封された「原稿紙」は、『雑記帳』第2号(1936年11月)に掲載となった「写真づら」と考えられる。曾宮の「雑組 才二 昭和十一年十月」と表紙に横書きタイトルされた随筆の草稿を集めたノートに10頁にわたって「写真づら」が書かれ、なんども推敲したあとがのこされている。なお、エッセイ文中にある軍服を着た三歳時の写真は、「生誕130年 曾宮一念展—空にけやきをゆるす風」で資料紹介した。

【総合工房 松本俊介宛 1936.11.8 消印】



前略、今月、文春誌<sup>※1</sup>に随筆をかき、素描は例により断ったのですが、友人が来て何でも といってスケッチブックを破いてもってゆきました。それで、この前、貴誌からの御依頼を断ったのにほかへは貸したことになりますが、もし、スケッチブックを破った程度のもの(鉛筆)<sup>※2</sup>でよければ御貸します。御はがき下されば、郵送してもよいし、又、ちょうど正午か夕六時ならお渡しも出来ます<sup>※3</sup>。もちろんつまらぬのでおすゝめはいたしません。右ご理解を得たく、早々、

※1 「文学者と画家」文芸春秋No.14 (1936年12月)と考えられる。

※2 『雑記帳』第3号(1936年12月)に挿画「岩礁」「いちぢくの秀作」が掲載されている。借用したのが、この鉛筆の画であるか特定しかねるものの時期が重なる。

※3 11月10日の曾宮の日記の来訪欄に「松本禎子」と記述あり。禎子は、この葉書を受けとってまもなく鉛筆の画をとりて曾宮のもとに向いたのであろう。

(次号へつづく)